

## 第74回全道高等学校演劇発表大会 in 小樽「運河きらめくオタルナイ大会」

上演番号12番 北海道大麻高等学校（石狩支部）

### 「春望」 作：山崎公博

壁一面の棚に置かれた小道具、散らかった大量の衣装箱、古いパネル類。物語の舞台は、演劇部とボランティア部が共同で使う教材室で始まる。更には道具の置き場に困った空手部も加わるようになった。顧問からの期待を受け、大会の実績を誇る空手部と、たくさんの新入部員により



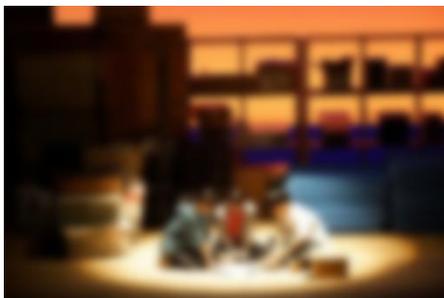
活動を広げたいボランティア部に対し、新入生すら入らず実績のない、廃部の危機にさえある演劇部は、徐々に部屋の中での存在感を失っていく。この状況はまさに『戦争』といえる。部室に溢れる演劇部の物はどれも、今まで先輩から受け継いだ伝統であり、それを誇りに思う部長の沙織は、自分たちの宝物を『ゴミ』のように扱う空手部に抗うが、両者とも大切なものを守りたいという点で、どちらの立場にも共感できると

いった意見があった。しかし、同じ3年の宏人は、沙織の思いに気づきながらも友情を優先し空手部を進んで受け入れていこうとする。ここで、唯一の2年生である千加へと焦点が当てられていく。

3年生が引退した後、千加はどうするのか。沙織への敵対心から演劇部を辞め、ボランティア部となった松田は千加をボランティア部へ誘う。この松田の自分の立場への執着が対比となり、沙織の演劇への情熱を強く表す。追い詰められる沙織を前に、千加は『演劇続けます』と言えなかった。それは、沙織の思いを感じながらも、自分がこの演劇部を守っていける自信がなかったのではないだろうかとの意見があった。しかし、剣を



振ったのは千加だった。その剣は、端から見ればおもちゃだ。しかしそれは千加の姉がこの演劇部でピエロを演じた際、死にゆく戦士から受け継いだものであった。難病を患う今の姉と、死にゆく戦士の姿が重なる。その剣を千加は受け継ごうとした。本当に剣で刺してしまえと言いたいほど、この千加の行動に胸を締め付けられた。そこで、演劇部という国の中にあつた内戦は終わり、空手部、ボランティア部、生徒会に負けじと3人は再び根強く活動を続けていく決心をする。



題名の『春望』は、新入生が入ってほしいという願望だけでなく、唐の時代の中国の詩人である杜甫の春望の、戦乱化の中故郷を思うという点にリンクしているのではないかという点で、まさに3人の覚悟を感じさせられた。この物語でいう故郷は、演劇部やその伝統、先輩への思いだろう。この舞台からは、お互いに本音を知り合う大切さ、それを尊重して分かち合う難しさを痛感させられた。そして『思いを受け継ぐ』ことの力

にとっても心揺さぶられた作品であった。